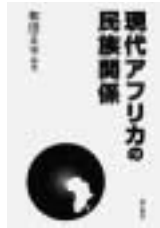


資料紹介

和田正平編 現代アフリカの民族関係 東京 明石書店 2001年 563p.



21編の論文が収められた大部な書物である。本書は、4年間にわたり国立民族学博物館で実施された共同研究会の成果であり、アフリカのさまざまな地域における民族と民族、また民族と国家の動態的な関係を扱った論文が収録されている。政治学者である戸田真紀子氏の論文を除く20編は、人類学者の手によるものである。

収録された論文が扱う地域やテーマにはかなりの多様性があるが、近年アフリカ社会が経験した変化を捉えようとする姿勢は共通している。そのため従来は他の学問分野の守備範囲だった国家や開発といった問題群が分析に組み込まれ、一昔前の人類学のイメージとは異なる成果に仕上がっている。いずれもフィールド経験の豊富な研究者の仕事だけに、オリジナリティの高い、刺激的な論考が多い。あえて数点を挙げれば、近代医療と伝統医療の併存を描いた白井和子氏、仮面儀礼に表出する「外国人意識」を論じた佐々木重洋氏、割礼をめぐる緊張関係を透徹した分析を加えた小馬徹氏、キリスト教の急速な受容の背後に見える遠大な歴史を論じた吉田憲司氏の論文が特に印象に残った。

本として大部に過ぎる、まとまりに欠けるといった難点を本書が有していることも事実であろう。しかし、そうした難点は長所の裏返しでもある。本書はいわば、材料のしっかりした幕の内弁当なのだ。21名の執筆者はいずれも一線級のアフリカニストだし、個々の論文は専門外の者にも読みやすく書かれている。アフリカの現在に関心を持つ人はとりあえず本書を開き、どこからでも読んでほしい。必ずや面白いと思える論考に出会えるだろうし、そこで日本のアフリカ研究のフロンティアに触れることができる。9800円とやや高価だが、図書館のアフリカ関係の本棚には是非とも揃えておきたい一冊である。

(武内進一)

岡倉登志著 アフリカの歴史——侵略と抵抗の軌跡 東京 明石書店 2001年 340p.



本書は、1979年に出版された『ブラック・アフリカの歴史』（三省堂）の改訂増補版である。初版の構成、記述を基本的に残した上で、初版の出版以降に生じたアフリカ大陸での紛争について一章を追加し（「V. アフリカの光と影」）、本文および資料、参考文献に加筆修正が施されている。したがって、初版のねらいであった、「分割される側」の「抵抗や、主体的行動」に焦点を当てるといった視点はそのまま活かされている。

初版に接したことのない読者のために内容を紹介すると、本書は副題が示すとおり、16世紀に始まるヨーロッパ諸国による征服と支配に対する、アフリカの抵抗の歴史についてまとめられている。奴隷貿易の時代から、アフリカ分割期、植民地支配期、1960～70年代の独立期までの抵抗活動について、広範かつ詳細に記述されている。特に、分割期から植民地支配期についての記述が厚く、初期の抵抗運動とヨーロッパ諸国による征服の過程について貴重な情報を与えてくれる。対照的に、独立直前の運動の扱いは、全体のバランスからみると小さいが、これは他に専門書が多いことに配慮しているものと思われる。

全体に事実に関する記述が中心であるが、抵抗運動に焦点を絞ってアフリカの歴史がまとめられており、抵抗史の入門書として、またアフリカの抵抗運動を俯瞰するものとして有用である。ただ、今回書き加えられた1980～90年代の紛争および南アフリカの独立に関する記述に、もう少し紙幅が割かれていれば、入門レベルの読者にはより有用であったと思われる。

(福西隆弘)

坂本邦彦著 東アフリカ農耕民社会の研究——社会人類学からのアプローチ 東京 慶應義塾大学出版会 2001年 301p.+236p.



本書はタイタ人(ケニア)とパレ人(タンザニア)という二つの山地農耕民をとりあげ、農耕民社会における変化の諸相を長期のフィールドワークに基づいて明らかにした労作である。全体で530ページを超える本書の前半部分は二つの農耕民社会の分析にあてられ、後半部分にはタイタ語とパレ語の基礎語彙集が掲載されている。

オーソドックスな人類学の研究のほとんどがそうであるように、著者はまず二つの農耕民社会を取り巻く生態系、その社会構成、言語、儀礼と世界観、経済活動などを丹念に洗い出していく作業をおこなう。そしてそのうえで、近代化や政府の諸政策の影響を受けながら農耕民社会が変容していく過程と、外的変化に対する人々の対応を分析している。地味だが堅実なこの研究アプローチにより、農耕民社会の変化の過程が「伝統性の喪失という方向ではなく、社会構造全体のなかに組み込まれた再生産のメカニズムによってあらたな状況を生成していく」(p.4)のものであるという著者の主張が、より説得的なものになっている。

研究対象としての「地域」に関する著者の考え方もユニークである。著者は、生態・生業的に共通の要素を持ち、かつエスニックグループ間のネットワークによって結びつけられた社会文化構造を持つまとまりを「地域社会」ととらえている。この考え方に基づいて著者は、山地農耕民として共通性の高い世界観を築いてきたタイタ社会とパレ社会の二つは、ひとつの地域単位を形成するものと理解できるとしている。民族でも国境でも宗教でもない、新しい視点からの「地域」のとりえ方が提唱されているのである。

社会人類学徒や農耕民社会研究にたずさわる人だけでなく、開発研究や地域研究にかかわっている人にも刺激の多い一冊である。

(高根 務)

井上一明著 ジンバブウェの政治力学 東京 慶應義塾大学出版 2001年 358+xivp.



本書には1977年から98年に至る20年間の、著者の仕事 that 収納されている。それらは、南ローデシアにスミス政権が誕生した62年から96年の大統領選挙までを、クロノロジカルに追っていきける構成になっている。

1980年代初頭から南部アフリカに関わってきた評者は、かつてジンバブウェの“いま”を知る縁として接した著者の諸論文が、既に歴史を語る趣であることに、改めてときの経過を感じないわけにはいかない。つまり本書の各章は、各時点におけるジンバブウェの“いま”を伝えようとして書かれたものだったのである。その臨場さが事実の詳細な記述を生み、ジンバブウェ現代史を記録する貴重な文献となってここに結実した。

ローデシア問題を理解しておくことは、南部アフリカ地域史を知るうえで欠かせない。キッシンジャーやキャリントン等を配したその舞台には、植民地帝国主義の残り香や、いまとなっては懐かしくすら感じる冷戦期アメリカ外交が、まさに「力学」として登場する。この当時のローデシアを形容する言葉として、本書には「時代逆行」という表現が繰り返し現れるが、時代に逆行しているという点では、現ムガベ政権も同様であろう。1980年代末の段階において一党制の樹立を目指し、マルクス・レーニン主義に基づいた、前衛党による「政府の支配」を打ち立てようとしたムガベは、世界の潮流から外れているという意味でスミスと共通している。

昨今の混乱によって、南部アフリカにはローデシア問題ならぬ「ジンバブウェ問題」が重くのし掛かっている。イギリスにとってこの国は、未だに掌に刺さった棘なのであろう。いままた、ジンバブウェ政治の“いま”を理解する縁が求められている。その仕事を井上氏に期待したい。

(平野克己)